今回ジャーナルにletter[1]を投稿し、出版されることになりました。
投稿当時はまだ修士2年だったのですが私のような
心理系の大学院生が医学系の英文雑誌に研究成果を投稿し
アクセプトされたことを非常に光栄に思います。

このような研究業績のおかげもあり
現在は奨学金を給付していただき
博士後期課程の学生として
研究に専念ができる日々を送っています。

今回は病識と服薬態度・精神症状との関連を
検討しましたが病識はそれ自体が複雑な概念であり、
関連要因も数多く報告されています。
今後もより一層、病識研究に邁進していきたいと思っています。

1. Ito S, Matsumoto J, Sakai Y, Miura K, Hasegawa N, Yamamori H, et al. Positive association between insight and attitudes toward medication in Japanese patients with schizophrenia: Evaluation with the Schedule for Assessment of Insight (SAI) and the Drug Attitude Inventory - 10 Questionnaire (DAI-10). Psychiatry Clin Neurosci. 2021;75(5):187-8.

私は「統合失調症における病識」を
研究テーマとしており大学院では
臨床心理学を専攻しています。

最初は学生アルバイトとして勤務していたのですが、
研究部の先生方に自身の研究テーマについて
聞いて頂ける機会があり
そののちに研究生として研究業務に
携わらせていただけることになりました。

研究生になってからは
統計解析のようなまさに「研究」
という内容だけではなく、
検査の実施や先生の診察の陪席など
知見を深める機会を
たくさんいただいています。

このように研究室にこもって解析をするだけでなく
実際の患者さんに会う経験により、
誰のために研究をするのか、何を目指しているのを
再確認でき、臨床心理学領域で言われる
「科学者－実践者モデル」のもと
日々見識を深めています。

研究環境の面でも、
膨大な臨床群のデータを解析に
使わせていただくなど贅沢な経験を
させていただいており、
外部の先生も交えた月に一度の
研究ミーティングにも参加させていただき、
研究者の卵として非常に貴重な体験を
させていただいております。